東灘 歴史の足跡をたどる

深江文化村編

音楽家が集う庭から生まれた阪神間モダニズム

私たちのまち・東灘は、どんな歴史を歩んできたのでしょうか。今回は「深江文化村」をテーマに、神戸深江生活文化史料館の道谷副館長をお招きして、知られざる歴史をインタビューしました。半農半漁の村として栄えてきた深江に、大正末期に誕生した西洋建築の住宅街。美しい芝生の庭で、外国人と日本人が交流し、芸術談義に花を咲かせました。なぜこの深江だったのか、どのような交流があったのか、阪神間モダニズムが生まれた現場を訪ね、その暮らしを紐解きます。

深江文化村にあった13軒の西洋建築住宅のうちの一軒、古澤邸。
深江文化村に住んでいたロシア人建築家・ラディンスキーによる設計

ヴォーリズの弟子が設計し、深江文化村が誕生

—まず、深江文化村が生まれた当時のことを教えてください。

深江文化村は、1924（大正13）年に誕生しました。この土地の所有者は、坂口磊石（さかぐちらいせき）という地元の医師でした。彼が2,000坪の土地に、文化の香りのする住宅街を作ろうと、開発したのが始まりです。

神戸深江生活文化史料館
副館長 道谷 卓さん

設計を担当したのは、当時近くに住んでいた建築家・吉村清太郎です。彼の師匠は、関西学院大学や神戸女学院大学といった、優れた近代建築を数多く設計した建築家、ウィリアム・メレル・ヴォーリズでした。吉村清太郎は、13軒の家が「ヤード」という共通の芝生の庭を囲む、西洋風の住宅街を作りました。路地沿いに家が並ぶ、日本の住宅街とは全く違う発想です。

—深江文化村の誕生に影響を与えたものは、何だったのでしょうか。

吉村清太郎が、ヴォーリズの弟子だったことが大きいです。ヴォーリズから学んだ西洋建築の良さを、深江文化村に生かしました。

また、1905（明治38）年に阪神電鉄が三宮駅（神戸）―出入橋駅（大阪）間で開業しました。阪神電鉄の方針として、「郊外居住の勧め」というのがあったんですね。大阪の経営者や大阪で働く人に、もう少し離れた環境の良いところに住んで、電車で通うという新しい暮らしを提案しました。このPRの影響もあり、大阪から阪神間に移住する人たちが増えました。

阪神間に住む人はもちろん、大阪の芸術家や文化人も、深江文化村の文化的なコミュニティに惹かれて集い、たくさんの交流が生まれました。阪神電鉄は当時まだ路面電車でしたが、芦屋や深江に駅があったので、大阪からアクセスしやすかったこともあると思います。

1961年に撮影された深江文化村の全景。中央の「ヤード」と呼ばれる共通の庭を囲んで建つ様子がよく分かる（冨永泰史氏撮影）

—どんな方々が暮らしていたのでしょうか。

1917（大正6）年に起きたロシア革命から逃れて、日本へ亡命した多くのロシア人がいました。そして、1923（大正12）年の関東大震災で被災し、大阪や神戸で住む場所を探したロシア人が、深江文化村を知り、その環境に惹かれて住み始めたのです。

13軒の家に、外国人と日本人が混在して住んでいました。文化人だけでなく、貿易関係の仕事をしている人も多かったようです。そこで、西洋文化と日本文化の交流が生まれたんですね。休日には約400坪ある広い芝生の庭に、住人たちが集いました。音楽や美術といった共通の話題で語り合ううちに、ここで文化が花開いていきました。家々が独立した庭を持っている形だったら、こうはならなかったと思います。やはり、ヤードの存在は大きいですね。

—どんな家が建っていたのでしょうか。

ここに1枚の写真（左上）があります。この1961年の写真には、深江文化村のほぼすべての洋館が映っています。この中の1軒、古澤邸を設計したのは、ラディンスキーという建築家です。彼も亡命ロシア人で、深江文化村に住んでいました。土地の持ち主である、坂口磊石の家もあり、角に小さな交番もありました。これは、住民の請願でできた駐在所で、街並みに合わせた洋風建築でした。今はもう、ヤードもほとんど残っておらず、当時の家は1軒のみとなりました。

各戸には、いわゆる近代的な設備が整っていました。例えば、13軒全体に配水できるような井戸や上下水道も完備され、汚水を処理する浄化層があったという記録も残っています。こういった最新の住宅地を、個人で開発した坂口磊石の先見の明には、驚かされますね。

西洋と東洋が交流した芸術の庭

—続いて、深江文化村で花開いた、阪神間モダニズムについてお願いします。

ここにはエマヌエル・メッテルという、非常に有名なロシアの音楽家が住んでいました。朝比奈隆や服部良一といった名だたる音楽家も、メッテルを慕って、深江文化村で学んだと言われています。

メッテル（写真中央・白い着物の男性）を中心に。外国人と日本人が交流し、阪神間モダニズムの拠点となった

メッテルは、ウクライナ出身で、ウクライナ侵攻の際に注目され、NHKからの取材もありました。実は、私もメッテルがウクライナ出身だと気づいていなくて、問い合わせがあって、初めて気がついたんです。

深江文化村は、メッテルをはじめ、同じウクライナ出身のヴァイオリニスト・モギレフスキー、ピアニストのルーチン、指揮者のラスカ、宮廷楽団長など、多くの音楽家が集いました。また、バイオリニストのミハエル・ウェクスラーに師事した貴志康一は、ラスカにも師事していて、旧制甲南高等学校で学びました。

音楽以外では、古澤邸を設計したラディンスキーが住んでいましたし、画家の小磯良平、詩人の竹中郁（たけなかいく）も深江文化村を訪れて影響を受け、絵を描いたり、詩を詠んだりしたそうです。メッテルの妻は、バレリーナで、宝塚音楽歌劇学校の先生をしていました。

住人は、ロシア人ばかりではなく、イギリス、アメリカ、ロシア、オランダ、ドイツ、スウェーデンといった国の人が、入れ替わり立ち替わり住んでいたようです。最初の人が建てた家を、次の人に譲っていきました。約100年前に、深江で華やかな国際交流が繰り広げられていたなんて、驚きですよね。

主にロシアから来た人たちとの交流を通して、芸術が花開いた深江文化村は、まさに阪神間モダニズムの一つの拠点でした。しかし、ここに集う人たちと地元の深江の住民との間に、どのような交流があったかは、よく分かっていません。もしかしたら、少し異質な存在だったのかもしれないです。ですが、モダニズム文化が、深江から日本全体に広がっていったことは間違いありません。

深江南町にある太田酒造貴賓館（旧小寺家別荘）も、ヴォーリズが設計した建築で、小寺家を訪れる人たちとも交流はあったかと思います。亡命ロシア人を含めて外国人の方が、深江文化村だけではなく、深江周辺に住んでいたのでしょう。

—華やかな交流はいつまで、続いたのでしょうか？

1935（昭和10）年頃まででしょうか。日本が戦時体制になり、中国との関係が悪化していくなかで、日本は国際的にどんどん孤立。すると、外国人たちは国外へと移住していきました。深江文化村が最も栄えた時期は、大正時代から昭和一桁頃までということになりますね。

東灘 歴史の足跡をたどる

深江文化村編

収蔵品が静かに語る 知られざる地域の歴史

―深江のまちは、この歴史を、今後どのように活かしていくのでしょうか。

深江の歴史の足跡として、深江文化村はできるだけ残したいですし、史料館には伝えていく使命があると考えています。とはいえ、最後に残った1軒は、個人の住宅ですから、無理強いもできません。皆さんに歴史を伝えていくためには、史料館できちんと展示をすることが必要です。先日、古澤邸が残念ながら解体されましたが、調度品や建築部材をできるだけ史料館で引き取り、当時の様子を再現できるよう展示しています。

実は、深江文化村は昔からよく知られた存在ではありませんでした。音楽家の間では知られていたのかもしれませんが、市民レベルでは、もうほとんど忘れられていた存在だったと思います。それが、インターネットで深江文化村の存在が広まるにつれ、史料館を訪ねてくる人が増えました。史料館では、資料を作って提供したり、深江文化村の向かいの神楽町公園に看板を立てたり、場所をご案内したりしています。

古澤邸の解体と 現存する冨永邸

―史料館での展示が素敵な古澤邸ですが、解体の前に調査に入られたとか。

２０２３年10月、解体する直前に、許可をいただいて調査に入りました。中の調度品は既に全部出されて、もう何日か後に解体という時期でした。館長が、持ち帰れるものを、史料館で展示したいとお願いしたら、古澤さんはぜひ飾ってほしいと、快諾いただけたんです。

古澤邸は、三角屋根が特徴の2階建ての西洋建築です。屋根裏部屋で、棟上げの時に棟梁や施主の名前や、建築年月日を書いたものがないか調べましたが、残念ながら見つかりませんでした。大阪窯業という刻印のあるレンガを使った暖炉や、ビザンチン様式の階段があり、2階には違い棚のある和室もありました。手作りガラスやタイルはとても美しく、スイッチ類に至るまでこだわって作られていました。当時飾られていた絵から、ドアノブ、格子戸、階段の一部まで、譲っていただいたあらゆるものを展示してあります。照明は天井から吊るしたり、カーテンレールにはカーテンをつけたり、なるべく部屋の様子を想像してもらいやすいように工夫しています。

―ほかにも何か見ることができますか？

設計当初の青焼きの設計図があります。こちらは、寄託という形でお預かりして展示しています。古澤邸のところには、「THE RESIDENCE OF MR.FURUSAWA（ザ・レジデンス・オブ・ミスター・フルサワ）」と記載があります。１９２５年の設計図の現物が残っているのは、大変貴重です。

―唯一残っている冨永邸について、教えてください。

１９２５（大正14）年に冨永初造が建てた、日本で初めてのツーバイフォー建築らしいです。冨永初造は、鈴木商店のシアトル支店の駐在員だったので、アメリカ暮らしが長く、その時のイメージを日本の暮らしの中に持ち込んだと言われています。貿易の仕事をしていて、深江文化村に住んでいた外国人と国際色豊かな交流をしました。

煙突のある瓦屋根の西洋建築ですが、屋根に日本瓦が使われるなど、日本の建築資材も使われていて、国の登録有形文化財に指定されています。13軒あった深江文化村の家も、相続などを理由に代替わりのタイミングで、1軒また1軒と解体されてしまいました。

1.解体される直前の古澤邸。印象的な三角屋根も建築当時のまま　2.屋根裏に上がると、しっかりした梁（はり）や柱が出現　3.洋室にあった暖炉。レンガには「大阪窯業」の刻印があった　4.優雅なたたずまいの階段。手すり部分の凝った装飾が美しい。手すりの一部は神戸深江生活文化史料館にて展示している

次世代に受け継ぐ 生活の歴史

収蔵品を解説する、神戸深江生活文化史料館 大国正美館長。日本近世史が専門で著書多数

―史料館では以前から、小学生の団体見学を受け入れていると聞きました。

小学3年生の社会科の「昔の暮らし」という単元を学ぶため、コロナ禍前は毎年30校以上が見学に来ていました。東神戸（中央区より東側）だと、こういった昔の生活文化が分かる展示は、うちにしかないので。ちなみに西神戸は、西区の埋蔵文化財センターへ見学に行きます。

当館は、１９８１年に、史料室という形で小さな施設を作って、１９８３年に拡張して今の史料館がオープンしました。当初、見学に来ていたのは、本庄・東灘・福池という、地元小学校3校がメインでしたが、先生が転勤して別の学校に行くと、その学校の子を連れてくるという形で、どんどん広がっていきました。

昔はどの家庭でも使っていた道具たち。子どもたちが史料館で現物を見て学ぶ意義は大きい

―阪神・淡路大震災の影響もあったのでしょうか。

はい。１９９０年代前半頃はまだ、祖父母の家に昔の道具があり、それを学校に持ってきて、実物をみんなで見せ合うということができた時代でした。ところが、地震の直前ぐらいになると、祖父母の家でも処分してしまったというケースが増えてきました。そして、震災で家が倒壊するなどで、全く失われてしまいましたね。そこから、小学校の見学数は増えてきました。本物は、家にも学校にもなく、史料館や博物館にしかないという状況です。

ただ残念ながら、指導要領が変わってしまい、「昔の暮らし」の授業時間数が半減しました。今までだったら、校外学習と兼ねて、史料館や博物館見学の時間が取れたんですが、それがほとんど取れなくなりました。今は、午前中の4時間を使って、学校を出発して見学し、給食までに帰ることができる、徒歩圏内の小学校だけが見学に来ています。

―史料館として、子どもたちに何を伝えたいですか。

史料館では、オンライン見学にチャレンジしています。本当は実物を見てほしいのですが、ｚｏｏｍで実物を見せながら説明する、ということができないか、数年前から検討しています。双方向なので映像を見せながら、「これ、なに？」と質問を受けて答えられるといいな、と個人的に思っています。そのほか、ホームページでは、収蔵品の３Ｄ写真を公開しています。映像をぐるっと回して裏側まで見ることができるんですよ。

歴史には日本や世界の動きという大きな流れと、地域や私たちの暮らしという小さな流れがあります。そのどちらもを知ることで、物事を立体的に捉えることができるようになります。時代が変わっても、先人が遺した物を通して、子どもたちが神戸や深江の歴史に触れる機会をこれからも作っていきたいです。

神戸深江文化村の古澤邸で使われていた調度品が、当時の暮らしぶりを伝える

地域の暮らしを伝える まちかどの歴史博物館

阪神深江駅の南東すぐの住宅街にある史料館。江戸時代の農具や漁具をはじめ、昔の暮らしの道具を展示しています。地元で医業を営んできた深山家ゆかりの品や深江文化村についての展示も見どころ。個人・団体からの生活文化史料の提供も随時受け付けています。

神戸深江生活文化史料館

神戸市東灘区深江本町 3-5-7
土曜・日曜 10：00～17：00 開館
（入館は 16：30 まで）
TEL 078-453-4980
http://fukae-museum.la.coocan.jp/index.html

写真提供：神戸深江生活文化史料館　　制作：神戸市 東灘区役所